

# カロリング時代の商業

宮 下 孝 吉

一

中世の経済史研究において今日でも争われている最大の問題点は、カロリング時代（七五一—イタリヤでは八七五、ドイツでは九一一、フランスでは九八七、すなわち、大ザッパにいつて、八・九世紀および十世紀）についての評価である。これは、古代から中世への移り行きのみならずヨーロッパ中世の社会や経済の出发点または基礎に関連している問題である。ピレンヌ、ドップシュ、ロンバルその他の現代経済史家が意見のはなはだしい差を示しているのは、カロリング時代の経済の記述においてである。

ジュレンヌ(H. Pirenne, 1862—1935)によると、カロリング時代の経済はメロヴィング時代(四八六—七五一)の経済とおおむね対照的である。メロヴィング王朝はローマ世界(Romania)の諸制度や組織を継続しかかりの量の中東との遠地商業を行っていたので、彼らの眼は地中海に向けられていた。他方、カロリング王朝は北海に眼を向け、そして、中世文明にとって最大の重要性をもち続けた一連の新しい諸制度を創造した。カロリング王朝はメロヴィング王朝の活発な自主貿易を継続せず、むしろ、荘園経済を伴なうほとんど「全く農業的」な社会のなかに退歩したのだとピレンヌはいう。

カロリング時代の商業(宮下)

二つの社会および経済のこの対比は、八世紀の初年代における回教徒の勢力拡大による西地中海における海上支配権の獲得によっておそらく起された。回教徒の海賊や侵入者たちは、西ヨーロッパと中東との間の商業ルートを切斷したと考えられた。過去とのこのはっきりした断絶は、パピルス、金貨、東方の奢侈的な織物、近東のブドウ酒や油が西ヨーロッパでは消滅した（といわれる）ことのなかに反映している。ではあるが、このおどろくべき変化をカール大王（七六八—八一四）がもたらした役割はピレンヌによって強調された。彼はこの大王を古い経済の最終清算人でありかつ中世世界の創造者であるとみた。マホメットおよびそれから生ずる回教徒の拡大なくしては、カール大王およびカトリック世界は考えられないであろうと示唆された。

ドップシユ (Alfons Dopsch, 1868—1953) は、この対比は概して錯覚に基づくものであると主張した。カロリング世界は過去からのほんとの断絶を印しなかったと彼はいう。カロリングの社会と経済とは、ドップシユにとっては、メロウイング世界からの自然の発展であった。過去の組織および制度的生活との判然とした断絶がなかっただけではなく、初期カロリング世界には文化の「ルネサンス」があり、これはメロウイング時代によって示された約束の実現とみられうるものであった。ドップシユは、カロリング時代の文書に現われた週市および祭市の多くの実例を利用し、かつ、特に農業生活の連続性と拡大とに注目した<sup>②</sup>。彼の諸研究はきわめて示唆に富むが、商業史の研究者にとってはピレンヌの諸研究と同じように、討議のための基礎を大して作り出さなかった。しかし、彼の諸研究は農業史の問題を研究する者には基本的である。

フランスの学者ロンバル (Maurice Lombard?) は第三のテーゼを呈示した。これはピレンヌのテーゼと対蹠的に対立する。中世初期には西ヨーロッパから近東へと金の流出があったと以前の学者たちが示していたけれども、回教徒史の研究者であるロンバルは、そうではなく、大回教国の創建がメロウイング時代末のよろめきつつ

ある經濟に潤滑劑として役立つよう、貨幣を回教徒世界からヨーロッパに流出させたと論じた。回教徒から西ヨーロッパに流入し、かつ、カロリング時代の「ルネサンス」を可能にしたところのカロリング世界の社会、經濟生活を生んだのは、鑄造貨幣であつたと彼はいう。回教徒たちは、いまや、經濟復興史上の英雄として代表された。

カロリング時代の經濟を取扱つた他の多くの學者たちのうちで、スウェーデンの經濟史家ボーリン (Sture Bojin, 1900-) は特筆に値する。彼は北ヨーロッパおよび東ヨーロッパにおける出来事と地中海地域における出来事との間には密接な関連があると主張した。彼によると、スウェーデン人のロシア侵入はカロリング王朝およびその經濟の理解にとつて、回教徒の勃興と同じように重要であつた。ピレンヌと対比して、彼は中東との交易は少しも停止しないと考へた。ボーリンは八世紀および九世紀前半にはアラブ勢力の東漸により、コラサン、トランスオクソニアの領有に伴ないパンジャヒル、シャンシュ、鉾山の開發の結果、回教徒世界には銀の生産に大上昇があつたことを指摘した。彼はまた、この銀が宦官、男女の奴隸、金欄、海狸やてんの毛皮、その他の毛皮ならびに刀劍の買入れのために西ヨーロッパで費消されたことを回教徒の史料から示した。しかし、これらの財貨の多くはフランク王国の特産物ではない。とりわけ奴隸と毛皮とは東の斯拉ヴ地方から西ヨーロッパに大量に輸入され、しかも、バルト海やロシアに侵入し始めつたスカンディナヴィア人の媒介によつてであつた。いしかえれば、西ヨーロッパはスカンディナヴィア人から斯拉ヴ地方の財貨を購入し、ついでこれらを回教徒に転売した。回教徒たちは、これに對して、彼らの所有している銀をますます多量に支払つた。

この北歐—アラブ交易をボーリンはピレンヌとは全く對立した意味で「モハメットなくしてはカール大王はありえなかつた」といつて、簡単に表現した。というのは、彼は事實上世界にわたつてゐる規模での交易の拡大を心に描いたからである。しかし、彼はさらに一步すすんで、ロシアへ侵入したスウェーデン人の指導者「ルーリック」

(Runk, +879) なくしては「カール大王もありえなかった」という。北欧、西欧、回教圏という三角交易は、ノルマン人(または一層適切にはワレーガーと呼ばれる北欧スウェーデン人)が東方における回教徒と直接の交渉を開くべく南ロシアに領土を拡張した九世紀中頃には終った。以前には西ヨーロッパ人を仲介者として必要としたこの商業(イスパニア回教圏→フリカーバグダット)は、いまやフランク王国を媒介することなしに、従って、イベリア半島を仲介地とすることなしに、直接に行なわれえた。その結果として、ポーリンは西ヨーロッパは九世紀の後半にはヴァイキングの活躍が積極化することによって衰微した<sup>①</sup>と考えた。

以上要約した諸説のうちで最も影響力があり他の学説を起させたのはピレンヌの説である。ピレンヌのテーゼの最も重要な註解者はアメリカへ帰化したイベリア人ロペス(Robert S. Lopez 1910-)である。既にロンパールやポーリンの論文が出る以前に、ロペスはピレンヌのテーゼの中核が回教徒の拡大に与えられた役割にあると指摘した。西ヨーロッパの経済における諸変化が、もし、ピレンヌが提出したように回教徒による西地中海支配と密接に関連していたと示しえられるならば、ピレンヌの主張ははかり知れないほど強化されるであろう。しかし、事実においてはロペスはそうではないことを示した。パピルスについては、多くの文書用にパピルスを必要とするローマの慣例が支配していたような場所では、多量のパピルスは回教徒の征服以後三世紀の間輸入されつづけた。この地域でパピルスの使用が消滅したのは、ポロ製の紙が導入されたとき、すなわち約三世紀のち(一〇五七年)のことである。他方、ローマの慣例がすたれてしまった地域では、羊皮紙によるパピルス代替はパピルスの生産地であるエジプトをアラブ人が征服したことによって直接にもたらされたのではなく、約五〇年以後に回教徒の国家独占の組織によつてである。アラブ人がパピルスの海外への販売に一時的禁止をしたときは、西ヨーロッパ人は羊皮紙を用いねばならなかった。そして禁止が撤廃せられたときには、彼らは比較的わずかな事例のほかは、古い慣例には

戻らなかつた。ロペスはまた、西ヨーロッパにおける金貨の消滅は回教徒の拡大と関連されえないことを示した。東方の奢侈的な織物その他、スパイス類の供給における変動は、回教徒の拡大とは別の原因から起つた。かくして、ピレンヌのテーゼの中核が疑問とされたのである。

以上述べた諸見解の要約的な検討からわかることは、第一に個々の諸事実の重要度について、第二にその諸事実そのものについても、歴史家たちの間にまだ一般的な承認が存していないことである。ではあるが、ロペスによつてきわめて見事に始められたピレンヌのテーゼの修正は、この問題を研究する各国の多くの学者たちと共に、現時点まで続けられている。しかし、その努力のすべてが均しい度合の価値があるのではない。そこで、以下、確定された諸事実に基づいての解釈を施さうと思ふ。

注① ヴィレンヌの貨幣は *Revue Belge de Philologie et d'Histoire*, T. 1 (Mahomet et Charlemagne) 1922 pp. 77—86; T. 2 (un contraste économique: mérovingiens et carolingiens) 1923 pp. 223—35 と展開された。著書 *Mohamet et Charlemagne*, Paris 1935, 1937<sup>a</sup> 及び *ボルト* である。英語 (B. Miall), *Mohammed and Charlemagne*, London 1939。ドイツ訳 (P. E. Hühnger), *Geburt des Abendlandes*, Amsterdam 1942 及び *フランス*。

注② シュピントの業績は *Die Wirtschaftsentwicklung der Karolingerzeit*, Weimar 1921—22 のほか、*Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung*, II, Wien 1924<sup>a</sup>, Kap. 6 u. 7 に扱われている。また *Naturalwirtschaft und Geldwirtschaft in der Weltgeschichte*, Wien 1930 にもピレンヌ時代を扱った箇所がある。注③ M. Lombard, *L'or musulman du VII<sup>e</sup> au XI<sup>e</sup> siècle*, *Annales, économies-sociétés-civilisations*, T. 2 1947 pp. 143—60; *Mohamet et Charlemagne, le problème économique*, *ibid.* 3, 1948, pp. 188—99。

注④ S. Boiin, *Mohammed, Charlemagne and Ruric, The Scandinavian Economic History Review*, Vol. 1 1953 pp. 5—39 及び 一九三九年 *Skandia, Tidskrift för historisk forskning*, 12, pp. 181—222 にスウェーデン語で発表された。

注⑤ R. S. Lopez, *Mohammed and Charlemagne, a Revision*, *Speculum*, Vol 18, 1943 pp. 14—36; *East and West in the*

Early Middle Ages: Economic Relations. in: *Relazioni del X Congresso internazionale di Scienze Storiche*, Vol. 3, 1955, pp. 113—163.

⑥ その状況については A.F. Havignurst(ed.), *The Pirene Thesis. Analysis, Criticism and Revision*. Boston 1958 などを参考し、A. Rising, *The Fate of Henri Pirenne's Theses on the Consequence of the Islamic Expansion. Classica et Mediaevalia*, XIII 1952, pp.87—130 (佐々木克巳「ピレンヌ・テーマをめぐる諸問題」『社会経済史学』第二十七巻第五号、一九六二年、七五頁以下)を参考せよ。

二

この問題の理解については、考えておくべき前提条件がある。それはカロリング時代以前の商業をどのように見るかである。この見方如何によって見解が異なってくる。これが一つの事情である。これと同時に、カロリング時代以後の商業発展をどの程度まで比較考察のなかに入れるか、が見解を岐れさせる他の事情である。いいかえれば、カロリング時代の商業を考えるに先立って、それに先行する時代の商業のみならず、それに後続する時代、とりわけ前者を、少なくとも念頭におかなければ問題点を明らかにしえないであろう。

古典時代から中世への移行行きの問題として先ず地中海世界をとりあげてみる。ローマ帝国は地中海を基礎として立っていた。地中海はローマ帝国時代に始めて、一つの（文化的または経済的）統一体を形成したといわれうるか、それともローマ帝政期をも含めてそれ以前のいわゆるヘレニズム時代にこの統一体を形成したといわれねばならぬかは議論の余地がある。しかし、一つの統一体を形成したといわれうる限りでは、すべての商業通路が地中海または地中海附近を通じて都市ローマに達していた。だが、中部ヨーロッパおよび西部ヨーロッパにおけるローマの支配が漸次に弱まるにつれて商業は衰えたが依然として持続して行なわれ、ローマの組織のもとにあったときに示

していた概略のさまざまな路線の上で行なわれた。かくて、五世紀にはヴァンダル族の支配する北西アフリカは、地中海を横切つてイタリアに穀物を輸出し、六世紀には西ゴート族の支配するイスパニアは、沿岸づたいに南フランス、北アフリカおよびイタリアと交易し、中部ヨーロッパの生産物は陸路を通つて大陸の南西隅に到着していたようである。イタリアでは南部の諸都市とくにサレルノ、アマルフィ、ナポリ、オトラントは、七〇〇年頃でもシチリアおよびエジプトとの貿易に従事していた。しかし、商業活動が最も盛んであったのは、コンスタンティノープルであった。そこにはペルシア人を介して極東と若干の接触があつたし、イタリア、時としては西地中海地方との規則的な交易もあり、エジプトとは規則的に交易が行なわれていた。

六世紀の後半におけるアレキサンドリアのギリシア商人、コスマス (Cosmas Indicoplestes) は彼の活動を誌している。彼は地中海、紅海、ペルシア湾、インド洋を帆走した。一度は内インド (アラビアからコモリン岬以東の地域) に向つた。彼はセイロンを訪ねた。セイロンは——彼のいうには——「南西インドの」胡椒園のあちら側に存しておりこの島は中央に位しているので、インドの各地方、ペルシア、エチオピアの船がしばしば訪ねてくるが、自らの船も多く派遣し、最も遠方の国々 (コモリン岬以東、Tzinista—シナ) から絹、蘆薈 (ろかい)、丁香 (ちようぢ)、白檀その他の生産物を受取り、これらはこちら側の諸市場に、胡椒が成長しているメール (マラバル海岸) や銅、胡麻の木、衣服用の布を輸出しているカリアーナ (ボンベイ附近の港) に引渡されている。このように素描されたシナとインドとの海上ルートは、西の方へは、シンド (インドの前線、今日の西パキスタン)、ペルシア、アラビア (イエーメン) を經由してエチオピアの港アドゥーレ (ソマリランド) につづいていた。アドゥーレへはさまざまな香料や北東アフリカ産の「その他の商品」が輸出のために到着した。コスマスはエチオピアの「大部分」をみたといふ。彼のいうエチオピアとは南は赤道に至るまでの東アフリカのことである。

コンスタンティノーブルへは、ヨーロッパから赴く重要なもう一つのルートがあった。これは後述するが、スラヴ族が南ロシアへ移動したために崩壊し、北欧人によって九世紀に再開された。

上述のことから明白であるのは、ゲルマン人の侵入はヨーロッパの商業にかなり被害を与えたのは疑いなくけれども、商業を全く破壊し去ったのではないということである。しかし、ヨーロッパの必要としている財貨は大いに減退され、これに伴って、交易量——困ったことには数量ないし統計的数字で示されえない——が減少したと考えられる。中世ヨーロッパの商業通路が、どのようにして維持されたかの問題からみて一層重要なのは、回教徒アラブ人が七世紀に前進してきたことである。一五〇年以内に、地中海に沿うアフリカ海岸の全部が彼らの手中におち、また、イスパニア、シリア、パレスティナの大部分、ペルシア湾の両岸も彼らの占領するところとなった。かくて、地中海の諸ルートの若干が遮断されただけでなく、ヨーロッパと極東との主要交通路線の二つが完全に回教徒アラブ人に制御されるに至った。陸上ルートはこのときまでに重要でなくなってしまうので、回教徒アラブ人はヨーロッパと極東の商業通路すべてを支配するようになったといってもよい。南イタリアとコンスタンティノーブルとの間には若干の交易が持続し、漸次に、エジプトの回教国主たちとの商業関係は、コンスタンティノーブルにおける商人階級によって、常時ではないけれども、再開され、レヴァント〔近東〕人とイタリア人とがますます重要な役割を演じつつあった。

その間に、北欧人は西部ヨーロッパを襲い——回教徒が他の処〔地中海地方〕で行なったと同様に——交易には致命的な状態をもたらした。九世紀には地方的交換と区別されたほんとの貿易〔国際商業〕は行われなかったといわれている。しかし、北欧と地中海地方との接触の一線は依然として存在していた。すなわち、バルト海から黒海への線、これである。ロシアの中心部に発する諸大河は北と南へと流れている。スウェーデン人が利用したのは、



これらの河川であった。八〇〇年頃、彼らはラドガ湖の南岸に一つの駐留地を設けた。そこはフィンランド湾から容易に達せられ、ニーヴァ河から三九マイルほどの地点にあった。この駐留地は二つのルートを支配した。南へはヴォルコヴ河がノヴゴロッドに導き、そこからロヴァート河によってドニエプル、黒海、コンスタンティノーブルに達した。東へはスヤシおよびモローガの両河によって、商人はヴォルガ河、カスピ海、東方の諸市場へと通行した。イルメン湖畔のノヴゴロッドとドニエプル河畔のキエフとは、これらのルートに沿う最も重要な商業中心地となった。これらのルートは十一世紀まで、開通しつづけていた。これらの線に沿って、北欧の主要産物（毛皮、蜜、奴隸）が送られ、これに対して商人は香料、ブドー酒、絹、貴金属を入手した。この商業活動の若干は、まもなく北海にまで拡張され、かくてイングランド、低地地方、北東フランスへと拡がった。（次いで、ヨーロッパは回教徒の支配する西地中海を迂回するルートを発見したのであり、これは恰も後代にトルコ人が紅海を支配していたのを避けてアフリカ迂回のインド洋航路を発見したのと全く同じ仕方であったといつてよい）。

だが、以上述べたところを、あまりにも嚴格に受取つては、誤りになることを注意しなければならない。

地中海は全部が全部ヨーロッパ人に閉ざされたのではない。九世紀におけるヴェネツィアの勃興は商人が宗教問題をあまり考慮しなかったことを明示している。すなわち、キリスト教徒の商人たちは、異教徒（回教徒アラブ人）と交易を喜んでしようとしていたのである。エジプトとのヴェネツィアの連絡は九世紀に始まっている。ヴェネツィアはその北東の背面地に多量に産する木材や鉄および奴隸をアラブ人の造船所および宮廷の需要を充たすために送った。この発展はビザンツの商業の増大する支配、またまもなくシリアの諸港との交易の発展と平行した。かくして、西ヨーロッパと東方との基本的な連結の一つが再開された。

イタリヤの他の都市も地中海商業において優勢であった。南イタリヤの海港都市（サレルノ、アマルフィ、ナポリ、カロリング時代の商業（宮下）

ガエタ)は回教徒の諸地方と交易した。とくに、アマルフィを介して、最初はアレキサンドリアに送られた財貨がヨーロッパに伝達された。これら南イタリアの諸港はその地位を十二世紀の初年代にまで維持した。

ここに特筆すべきは、北イタリアのヴェネツィアは一度もアラブ人の被害をうけなかったことである。回教徒アラブ人の地中海域への侵寇は、フランス、イスパニア、イタリアの一部を「封鎖」したとしても、その封鎖は完全でもなく即時でもなく、フランク王国の国際商業はビザンツ支配下のヴェネツィアを通じて継続された。回教徒アラブ人の勢力拡張は東方商業の没落をもたらさなかった。というのは、彼らは商業を破壊しようとの意思をもたず、また、破壊する能力もたなかったからである。

カロリング時代の国際商業の形態はメロウイング時代のそれと異なっていた。フランスは近東と直接の交通をもたず、回教徒イスパニアとかビザンツ領イタリアを介して取引し、また、バルト海、ロシアおよび東部ヨーロッパを介して間接に接触した。ヨーロッパ全体が国際商業のなかにまきこまれてしまった。この国際商業は、歴史上はじめて真の相互交換の形態をとった。しかし、西洋における東方商業の実際的中心はイタリアであり、フランスは自然、第二次的な重要性しかもたなかった。<sup>⑥</sup>

ローマ時代の商業は北海沿岸には達しなかったけれども、ライン下流からさらにバルト海へと達して、ゴートランド島には一流の商業中心地があった。イギリスに來襲したデーン人がカスピ海や黒海を通じて東方貿易を行い、ゴートランド島上の商業中心地をアラビア貿易の中心地とした。このアラブ人がマラバール海岸にいたり、インド・アラビア間の香料取引を独占していた。ヨーロッパでは四世紀と七世紀との間には大きな商業交通上の断絶はなかった。<sup>⑦</sup>とすれば、次に問題となるのは、カロリング時代とくに八世紀後半と九世紀ではどうであったかである。項を改めて考えよう。

注④ J. W. McCrindle, *The Christian Topography of Cosmas, an Egyptian Monk*, London 1897, p. 365ff.

⑧ R. S. Lopez, *the Trade of Medieval Europe: the South, the Cambridge Economic History of Europe*, Cambridge 1952, p. 269ff.; R. S. Lopez-J. W. Raymond, *Medieval Trade in the Mediterranean World*, New York 1955 に  
おける史料を看よ。

⑨ 詳しくいえば、四世紀から五世紀末までは商業は衰退し、五世紀末から七世紀中頃まではイタリア、コンスタンティノープル、アレキサンドリアが栄えて商業は盛んとなったが、七世紀中頃からはその盛んな商業も収縮した。従って、商業発展には上昇下降があった。

### 三

カロリング時代の商業の展開を考えるには、当時の世界を念頭におかねばならない。

九世紀初年代の世界は三大国に分かれていた。カロリング王朝のキリスト教国フランクは大西洋を西境にし、東部ではエルベ河に達しており、ローマ教皇を宗教上の権威として承認したすべての地方を包含している。半月旗のひるがえる回教国はヘラクレスの柱像からイスパニア、モロッコ、アルジェリア、エジプト、パレスチナ、バビロニアおよびペルシアを含み、このほか地中海の諸島、アラビア、少なくともインドのシンド州を支配している。唐代のシナはペルシアの東境から大太平洋にわたっている。これらの三大国家のほかに、小さいながらも独立したカザリア王国と今日のチェッコ、ハンガリア、ブルガリアなどを占めるスラヴォニア地方があった。後者はキリスト教ヨーロッパには属しない異教の地であった。

カロリング王朝フランク国の領土は、現在のフランスならびに西ドイツと北部および中部イタリア、さらに、ラテン圏地中海の諸島（バレアリック諸島を含む）、最後に、ナヴァール地方からイスパニア辺境附近すなわち、後のカロリング時代の商業（宮下）

タロニアまでを含むピレネエ地方とから構成されていた。したがって、カール大帝が逝く頃（八一四年）フランク国に編入されていなかったのは、イギリス諸島、北部イスパニアの小さなキリスト教諸国、回教国イスパニア、ビザンツ領南イタリアおよびシチリアにおける回教国旗のもとに生活しているキリスト教徒であり、これらを除けばキリスト教的西ヨーロッパ全部がフランク国をなしていた。ビザンツ帝国は政治上・宗教上フランクと対立していたのである<sup>⑩</sup>。

このような情況のもとにおいて、少なくともカール大王およびルイ敬虔王（八一四—八四〇）の治世には、西ヨーロッパは以前の時代または直後の時代に比べて安定していた。カロリングの世界は農業生産の拡大をみた。そして生活や権力の中心は、地中海の沿岸および諸島から北ヨーロッパの地域および農村地方へと移動した。他方、ピレンヌが示唆したような地中海における商業の完全な停止はなかった。南ガリアの諸都市は、より古い都市的中心地の大多数がまさにそうであったと同様に衰微したのだが、財貨は西ヨーロッパに輸入されつづけ、さまざまな週市や祭市で購入されつづけた。メロウイング時代に重要な役割を演じたシリア人は、もはや明白ではなかったけれども、ユダヤ人のようなものがあった、以前よりはより大きな役割を演じた<sup>⑪</sup>。特定の諸地域の局地的商業が副業として行なわれた場合すらある。漁民は漁撈のためだけでなく、財貨輸送のためにも彼らのボートを用いたであろう。たしかに、交換のために数多くの週市や祭市が存在したのだが、以前よりも程度を増して農業所有地に依存した経済の成長は、その影響をもったに相違ない。人口は減少したかも知れないし、稠密な人口をもつ大きな都市的中心の収縮は、商業にある種の諸変化をもたらしたに相違ない。

しかしながら、この諸変化は人々が考えたほど急速でもなく完全でもなかった。比較的重要な若干の都市が常に存在していた。というのは、アングロ・サクソンおよびフリーセンの商人が八世紀にパリのサン・ドニの祭市を訪

れているからである。だが、貴族たちがこの週市および祭市を通行税や課金の収入源とみなしたことが史料から明瞭である<sup>⑩</sup>。その結果、さまざまな商業ルートには通行税や祭市、週市での課金の増加があった。これらの課金、税金があまりにも重課されたので、若干の商人はこれを避けようと試みたために、国王はその救済策を講じた。

しかし、商業に対する通行税その他の課金は、もし利益が十分に大きかったならば、商業を局地的に、さもなければ遠距離に亘って停止させるにはそれ自体としては十分ではなかった。市場が存在し買手があり価格が相当高ければ、その間は問題ではない。通行税や諸税金は財貨の価格に単純に付加された。そして、特定のルートに沿う通行税が圧迫的になると、財貨は一つの通路をすてて他の通路をとって船積された。それだけではない。王たちは特定の修道院・教会に通行税免除の特権をたえず許し、彼らのできる限りこの不当の強要から商人たちを保護しようとした<sup>⑪</sup>。カール大王時代のカロリング国のようなかなりよく組織された国家では、地方貴族は勝手に通行税や諸税を設けることは許されなかった。

修道院の多くは財貨を必要としたが、それはかなりの遠方から輸送されねばならなかった。国王たちはこれらの修道院に御用をつとめる商人たちを保護しようとした。自身のために財貨を輸送する修道士や修道院長は国王からの諸特権をもっていた。メロウイング末期に衰頹していた河川交通は、大西洋に注ぐ諸河川では明らかにやや回復した。ロワール河、シェール、ヴィエンヌ川はこの種の河川であった。地中海方面については、回教徒地方からの商品が九世紀にアルルで販売に供せられたが、経済活動の最も大きな地域は北方に移動した。これは多くの学者によって承認されている。商業交易に言及している諸文書のなかにとくに挙げられている諸都市(少くとも商業交易地)としては北方ではルーアン、カンシュ河畔のカントヴィック(Quentovic)、マーストリヒト、ライン河口に位するドゥールシュテート(Wijk bij Durstede = Dorestad)(ドーレシュテート)がある。

カロリング時代の商業(Ⅱ下)

そこで、北ヨーロッパにおける遠地商業を考えてみる。北海附近の地域では、カロリング初期には活発な商業が存していたようである。北フランスやライン地方には、当時全世界で需要されていた有名なフランクの刀剣（サーベル）が製造された。それだけではない。この地域はガラス製品や陶器類も生産した。イングランドや低地地方からは毛織物（マント）が来た。これは交易品として極めて重要であった。<sup>④</sup> なお、農産物も北海周辺地方では交換されたようである。カロリング時代にはいわゆる三圃農法（春蒔き作業の附加）がロワール以北の地域に導入され、しかも、馬のために適当な引き具が発展された。その結果生ずる農業生産力の増加は、食糧自給のできなかったフリーランドやスカンディナヴィアのような地域に食物を船積することを可能にした。北欧の商業では、地中海地域の商業に比べて、奢侈品の演じた役割の重要性は少ない。ではあるが、農産物は南方の商業に全く欠けていたのではない。というのは、南方は有名なブドー酒の生産地域であったからである。ブドー酒は重要な商品であった。しかも、注目すべきは、一大商業中心地域、北海と地中海とは互に切断されていなかった。ブドー酒が大西洋岸やさまざまな河川に沿って送られただけでなく、ヨーロッパの回教徒への主要輸出品の一つは奴隷であった。これらの奴隷の多くはアングロ・サクソン人によって北フランスで売られた捕虜のなかから先ず最初は購入された。なお、他の奴隷はフランク国の東部国境で捕虜となり奴隷にされていたスラヴ人であった。このことは九世紀の前半にはとくにあてはまる。

商業はカロリング世界にとっては今日ほどきわめて重要ではなかったけれども、カール大王は積極的に遂行した一つの政策をもっていた。この意味で、カール大王時代の「商業政策」を語ることが許される。

北ヨーロッパでは食糧の輸出はフリーセン人のみならず、スカンディナヴィア人、デーン人との関連において一つの「武器」として使用された。これらの民族はこの種の供給物に依存しており、その供給を差し控えることはカ

ロリング王たちにとってノルマン人を鎮圧する戦闘の「武器」であった。イギリス毛織物の大陸への輸出および巡礼の取扱について、カール大王とメルシア王オファとのすでに註14でふれた通信文は、このような交易が国王の注意をひくに十分なほど重要であったことを示している。九世紀にはブリタニアの船と商人とが北フランスや西フランスと接触していた。イングランドの商人はフランスおよびサン・ドニの祭市にきただけでなく、遠くローマを訪れたようである。同様に、有名なフリーセン商人は、カロリング国家内を一つの部分から他の部分へのみならず、カロリング国に属しないブリタリアへ、さらにローマに赴いた。

カール大王の商業政策は彼の国家の東境に沿っても、これと同様に明白である。ゲルマン人が西方のローマ帝国内に移動した跡の東ゲルマニア地方へはスラヴ人が来住していた。彼らはゲルマン人よりは一層幼稚であった<sup>⑬</sup>。カロリング国家に最も近接したスラヴの諸部族はカロリング王朝フランク人と商業的に接触していた。スラヴ族の南方にはアヴァール族が居住していた。彼らはドナウ中流溪谷に住み、ついにはカール大王によって征服された。彼らとの間に、若干の交易が存していたのは明白である。これら東方の部族との交易を取締るために国境市場が設けられ、彼らに武器を輸出することが禁止された<sup>⑭</sup>。ではあるが、中部ヨーロッパへの陸上商業は、地中海周辺の商業やイタリアと回教諸国領またはコンスタンティノープルとの間の商業ほど重要ではなかった。カール大王の息、ルイ敬虔王がドイツのコルヴェイ修道院に貨幣鑄造権を付与したとき、あの地域に來た少数の商人が外部から鑄貨をもち込むことが少ないからという理由で許可する旨を明言している。

商業を取締ろうとするカロリングガールの努力のなかで、これと同様に重要なのは農産物に対する価格の統制、貨幣鑄造の中央集権化である。カール大王は貨幣発行の取締りの重要性を明白に認識し、これを彼の支配のもとにおくことに積極的な手段を講じた。メロウイング末期の数多くの鑄造所が廃止され、一連の鑄貨改革が初代カロリング

王たちとともに始まった。これらの改革の精確な性質は目下のところ完全には解決されない種々の問題を残している。

地中海商業の主要な港であるヴェネツィアを征服しようとするカロリング王家の努力のなかに、商業政策ともいふべき一つの類似の実践を見出すのは誘惑的ではあるけれども、この場合問題は明白ではない。政治的考慮が南ヨーロッパではより大きな役割を演じたように思われる。ビザンツ人との関係は、北ヨーロッパや東方の比較的幼稚な民族との関係に比べて、はるかに複雑であった。

古いシリア商人の衰退も若干の新しい処置を必要とした。この空隙は、修道院およびカロリング王国の大領主に雇われた修道院御用商人や荘園御用商人によって、一部分は、みたまされた。とくに、ユダヤ人は王室のために重要な役割を果たした<sup>⑩</sup>。ルイ敬虔王に仕えたサラゴッサのアブラハムのような宮廷御用商人は、メロウィング王家に同様に仕えたプリスクスやソロモンのようなユダヤ商人の伝統をついだものである。ユダヤ商人は国際商業の最も重要な部分と考えられる奴隷貿易において、著しい役割を演じた。この奴隷貿易の中心地はヴェルダン (Verdun-sur-Meuse) と上ライン地方のマインツとであつて、ここでは捕虜が集められ南方に送られて回教徒に売られた。王家または大領主に雇われた御用商人は法外な課金から保護され、ユダヤ人はユダヤ人自身の法律 (「属人法」) に従うことを許されさへした。他の商人たちも統治機関に奉仕したから、同様な諸権利はできるだけ多くの人々におよぶよう拡大された。しかし、商人一般に特権を付与する場合には、北海に沿うカントヴィック、ドゥールシュテートやスロイス (Sluis) のような重要商業中心地における王室宝庫の収入を保護するよう注意が払われていた。

それゆえに、カロリング世界は、かつて想像されたように「全く農業的」ではなかった。カロリング時代のヨーロッパの修道院の大多数は、カール大王の勅令のみならず教会法によって禁止されていたにもかかわらず、彼らの



生産した余剰物の若干をおそらく売却した。この余剰はこの時代のはじめにはたしかに小さかったが、すでに述べた新しい農業技術の導入とカロリング国家の拡大<sup>⑧</sup>とは、余剰を増大させ、これらの余剰生産物は販売のため市場にもたらされた。それだけではない。食塩、金属製品、さらに、王国の一部分から他の部分に船積されねばならなかったその他の財貨のために、市場が常に存在していた。ではあるが、カール大王の商業政策はきわめて限定されていたし、経済の改善以外の目的に企画されていたことに注意せねばならない。

回教徒の拡大はビザンツ大帝国をヨーロッパの事件のなかで消極的な一勢力に低下させはしなかった。ビザンツは依然としてきわめて大きな有力な国家であった。この国家は中世を通じて商業に著大な影響をおよぼした。この事実はいしばし看却されている。そこで次に東方への遠地商業を考える。

回教徒の攻撃の最初のショックがすぎた後に、ビザンツの船隊は再建されて、巨大な地域にわたって支配力をおよぼした。ビザンツはその商人を常に油断なく保護し、積送される財貨およびその目的地に対する強力な監視を怠らなかつた。彼らの船隊は九世紀にいたるまでも、シチリアの支配維持をビザンツに可能にし、彼らは南イタリアおよび東イタリアにおける地域をも保有した。

近東の奢侈的生産物はガエタ、ナポリ、アマルフィ、バーリなどの都市、一なかならずく重要なのはヴェネツィアに送られた。イタリアにおけるこれらの都市は、みなコンスタンティノープルに首府をおく大帝国に加担した。このようにして、彼らは特権的な地位をうけ、近東のギリシア部分において商取引することができた。彼らはビザンツ帝国のキリスト教徒たちと取引しただけではなく、回教徒とも取引した。一隻のヴェネツィア船が九世紀の初めに聖マルコの聖遺物をアレキサンドリアからヴェネツィアに輸送したことは意義なしとしない。回教徒たちは、奴隸、船用材、フランク製のすぐれたサーベルその他の武器を熱心に取得しようとした。イタリアの諸都市

は、これらの需要品をヨーロッパ大陸から供給することができた。とくに、九世紀の商業において大いに伸張しはじめたヴェネツィアが、近隣都市のなかで指導的な役割を急速に演じた。奴隷は中部ヨーロッパやバルカン諸国から購入できた。もっともこの取引は感心されなかった。木材はダルマティア海岸で伐採できた。サーベル類は北方商人から購入できた。これらの財貨をヴェネツィアは地中海の東地域における回教徒に送り、その代わりに香料、絹、パピルス、後には紙、ならびに一層奢侈的な高価な他の財貨をすらも取得した。

南イタリアの西海岸の諸都市も回教徒とかなりの取引をした。南イタリア商人は北アフリカのバーバル種族居住沿岸を主として訪れた。もっとも、エジプトに向った船もある。これらの商人はヨーロッパの商品をもたらし、回教徒世界の商品をもって帰った。イタリアの大部分におけるビザンツの支配力は、比較的弱かった。そして、回教徒とのこの取引は承認されなかったけれども、これを停止させることはできなかった。

回教徒側の史料は西地中海における交易について例証している。ヨーロッパからのさまざまな国籍の男女の奴隷ならびに毛皮、若干の芳香料や薬剤、しかも真珠すらもヨーロッパからもたらされた<sup>④</sup>。これらの財貨の若干は、フランスの地中海諸港ならびにイタリアから船積された。

さらに、カロリング世界を文明の最も遠方の隅と連絡した別の交易の糸があった。いわゆるローダニーテス(Rodanics)というユダヤ人群が仲介者を通さずに、最も遠距離にわたって商業を行った<sup>⑤</sup>。回教徒の史料から、これらのユダヤ人の若干がフランスの南海岸の諸港またはイタリアから出帆してエジプト、シリアまたはビザンツ帝国に赴いたことがわかる。そこから、彼らは隊商によってあるいはナイルを遡りエジプトの紅海側にまたは一層おそらくはペルシア湾頭に達し、さらにインド、シナ、極東の諸島に達した。別のユダヤ人はフランスまたはイスパニアから地中海を横切って北アフリカに渡り、そして北アフリカ海岸全長を旅してアレキサンドリアに達し、そこ

からつづけてインドやシナに旅した。これらの大胆な商人がとつた第三のルートは、中部ヨーロッパ、ブルガリア人およびスラヴ人の居住地方を通じてカザール王国に赴き、次いで中央アジア、インドやシナに赴いた。これらのローダニーテスといわれるユダヤ人はフランク国のサーベル類、ヨーロッパの財貨をたずさえ、帰りにはヴェネツィアの市場で売れる東方の奢侈品、ならびに中部ヨーロッパの奴隸をもってきた。かくして、このユダヤ人の商業の範囲は旧世界（ユーラシア）の全域を含んでいたが、イタリア諸都市のこれに比べれば伝奇物語的性質の少ない日常取引ほど重要であつたとは思われない。

それでは、次にビザンツ人と回教徒との間の交易はどうであつたか。アラブ人によるビザンツ帝国の大部分の征服は、これらの地方におけるキリスト教徒すべてを即刻に回教に改宗させたのではなく、エジプト、シリア、コンスタンティノーブル間の商業的接触の諸ルートを全く切断したのでもない。両国間に平和が支配した時期には、ビザンツ（ギリシア）船はアレキサンドリアおよびシリア沿岸の諸港を訪ねつづけた。パピルスのような特定生産物は回教徒からのみ入手しえた。また、初期の回教徒征服者たちは、その征服した地方の行政的または商業的な制度を大して変更しなかつた。その結果、ギリシアおよびシリアのキリスト教徒共同体は依然としてかなりの商業を支配し、ビザンツ政府が有効に施行していた無数の諸統制規則により限定されることが、もしありとしても、幾分少なかつた。パピルスや特定の染色織物製造のためのビザンツ皇帝の独占は、回教国主たちの利益のために継続された。生産物はまさに規則的にコンスタンティノーブルに送られた。シリアでは小アジアを経由して財貨を運ぶために隊商が用いられたが、他方、セロイキアおよびアレキサンドリアからの船はコンスタンティノーブルという大市場へ生産物を運んだ。キプロスはこの商業における一つの重要な停留場所となつた。そのほか、回教徒世界の東部からの隊商ルートの網は、黒海の南東岸に沿うトランペンツドへ導いており、そこでは財貨がコンスタンティノーブ

ルへと積換えられた。両国間に紛争の起つた時期にはこの交易は幾分被害をうけたが、他方同様に永い平和の時期があつて、その時期には、互に大いに有利と考えた交通をビザンツ人も回教徒も妨害しようとはしなかつた。

しかし、アラブ人によるペルシアのみならずエジプト、シリアの占領が、近東の商業ルートに少しも影響をもたなかつたと推定するのは正しくないであろう。以前にはペルシア商人の仲介を通じて受取つていた極東の生産物は、いまや回教徒の手中にあつた。しかも、以前にはアレキサンドリアからコンスタンティノープルに送られて大人口を養つていた穀物は、いまやマホメットの出生地メッカ、マホメットの聖廟のあるメディナ、その他の回教徒都市に船で送られた。このような事情のもとでは、ビザンツ人はウクライナにおける別の穀物供給源に転じた。ウクライナではヴォルガの兩岸に沿つてカザールという国家が存在していた。この国家はビザンツ帝国国民とも回教徒とも取引していた。トルキスタンを横切る極東からの隊商ルートは、ヴォルガ下流に沿うイティール(アラストカン)というカザール人の首都に直接に導いた。ここには、八世紀から一〇世紀まで極東の生産物および回教徒諸領やビザンツ帝国からの商品が見出される。カザールの諸市場には遠方の地の商人たちが各種の財貨を取引していた。

回教徒世界との商業も九世紀にはヨーロッパロシアの心臓部に深く入り込んでいた。このルートはヨーロッパ大陸全部を横切つて遠方のスカンディナヴィア人をビザンツ帝国のギリシア人や回教徒たちと連結したとすら思われる。諸ルートのうち最初のもものは、バルト海にはじまりリガ湾に入ったルートである。リガ湾からはこのルートはドヴィナ河の溪谷を遡つて、この河の右岸にある今日のポロツク附近またはおそらく少し遠方の、同じくドヴィナ兩岸にあるヴィテブスクに通じた。そこから、旧スモレンスク付近のドニエプル上流に赴くには比較的短かい通路であつた。財貨はこの河を下つて数回大滝を過ぎ黒海の北岸に運ばれ、ここではギリシア人の回漕業者がこれを受

取った。

しかし、ドニエプル河はヴォルガ河のようにはこの交易には満足的でなかった。その理由は急流であり、また商業を保護する安定した国家がなかったからである。その結果、新しい商業ルートが発展した。それは強力なカザール国がヴォルガに沿ってこの種の保護を与え得た事実による。この新しいルートは、バルト海諸島からフィンランド湾頭に達し今日のレニングラードの地域に入った。それからは、商人はネルヴァ河を経由してラドガ湖の南岸に赴き、南方に転じてヴォルコヴ川の水流に沿い旧ノヴゴロッドの敷地に達した。この川の両岸に位置しイルメン湖のすぐ北にあるこのノヴゴロッドは、ワレーガーの商業都市として始まった。ここから隊商ルートが南東方向に急転し、トヴェル附近でヴォルガに達した。商業交易は、ついでヴォルガを下ってカザール国の都市セリーまたはイティールに達した。

このようにして、ワレーガーがその発したスカンディナヴィアという遠方の地域と回教徒の国家およびビザンツ帝国とを連結した。アラブ人の銀貨がこのルートに沿って発見されており、とくにスカンディナヴィアに大量に見されている。したがって、この「ワレーガーのルート」上の交易は、この時期を通じて成長しつつあったに相違ない。ヨーロッパ産の奴隸、毛皮、そして刀剣すらもウクライナで比較的廉価で買うことができた。いわゆるロス(Russ, Rhos)人が奴隸や毛皮を販売のためにもってきたという記事は数多くの回教徒の記録にみえる。これらのロス人たちの若干は、カザール人に通過税を支払った後にカスピ海を横切り、遂には奴隸や毛皮をバグダッドで売却した。ティグリスの両岸に沿うこのアッバス王朝回教国の首都は当時、コンスタンティノーブルに次ぐ商業および文化の中心地であった。この都市は九世紀の中頃にはやや衰微しはじめ。

× ×

× ×

地中海の古代的統一を破壊したのはアラブ人ではなく、ビザンツである。しかも、それは七一五年と七五二年との間に起った。その結果、フランクの勢力も回教徒の勢力もアーヘンやバグダットへと後退した。

地中海におけるビザンツの海上支配権は八二七年におわり、回教徒の前進の第二期が始まった。イタリアの西海岸は回教徒アラブ人の基地となり、西アルプス諸峠を通過する交易を妨げた。

同じ時期に西ヨーロッパはノルウェイやデンマルクからのヴァイキング（ノルマン人）によって襲撃され、スウェーデン人はロシアに前進した。また、南ドイツ、北イタリアにはマジヤール人の侵入があった。九世紀の後半はノルマン人の侵略活動の絶頂期である。

この異教徒たちの加えた被害を、キリスト教聖職の編年記者の誌すがままに誇大に受取ってはならぬ。異教徒ノルマン人の与えた影響も、回教徒アラブ人のそれと同様、即時に回復しえない性質のものではなかった。九世紀の末にはヴァイキングは戦利品を他に売却して平和的な商業交易を始めた。そのため、商業が刺激された地域もある。十世紀のアラブ商人の一旅行者は、マインツでアラビア貨幣の存在しているのを見ておどろいたほどである。商業に注目した同じ時代のアラブ人、アル・マス・ウーディは、フランク人の地域を旅して、この国には一五〇の都市が存在し、首都はパリであり、フランク人は「商業および手工業で生計を立てている」と報じている。このカロリング後期について詳述する余白をもたないが、次の諸点だけは略記しておかねばならない。

カロリング王朝フランクの地には外来商人のみが現われたのではない。ゲルマン系の土着商人もすでに七世紀の中頃以来、少なくとも下ライン、フランドル、北フランスに現われた。この種の商人はフランク人、フリーセン人、ザクセン人、アングロ・サクソン人と同一であると考えられ、彼らは商人の素質をもっており、その旅行の安全のため、また輸送の困難を克服するため隊商を組織して水路陸路を旅し、ヨーロッパの河港や海港に、さらには

内陸に到着した。彼らのうち、フリーセン人は疑いもなく専門的商人であった。カロリング時代とともにフランク王国の重点が北部のアウストラシアに移動し、フリースランドの征服は重要な河川をフランク国の領土に編入した。その結果、アルプスから北海沿岸までがライン商業の範域となった。ライン商業ではケルンが第一位を占めることができた。フリーセン商人はライン地方で北海諸地域を地中海諸地域と連結した。北海やバルト海のみならず、イスパニアやイタリアでも商業交易は消滅しなかった。

したがって、アラブ人の「地中海封鎖」によってヨーロッパの商業がゼロになって「封鎖的家内経済」に顛落したとか、回教徒の行なった商業のほかには局地的な近地商業、物々交換のみが存在するようになったとか、いうことはできない。

週市や祭市とは別の、交通の要路に自然に発達した隊商市場は、余剰生産物の販売所として役立った。この隊商は歴史上、新石器時代以来ヨーロッパに例証される類型の商人、すなわち遠地移動商人の組織したものである。彼らの活動は生産に食い込んでいない奢侈品の売買をも行なった。しかしこの発展は、すべての地域において等しかったのではない。十世紀には、政治的秩序の分裂と経済の局地化とをたどりつつあったフランスと、そうではなかったドイツとは異なっている。九・十世紀には中部フランスおよび北部フランスは地中海またはイタリアとの接触は少なかった。イタリアは東方商業を独占する気配にあり、ドイツは復興し帝権の強化に伴ってイタリアと連絡し、デンマルク半島にあるスカンディナヴィア、スラヴ人の国際的市場ヘデービイ（ハイタープ）をバルト海と地中海との財貨交換の通過地として用いた。これに対して、フランスは北部を除いては商業活動が甚だしく制限された大陸国家であった。かくて、西ヨーロッパにおけるカロリング後期の経済の衰微は、すべての地域においてではなかった。例えば、ワール河畔のティールはヴァイキングによって掠奪されたドゥールシュテートがカロリング

初期において果たした機能を継承し、ドナウ地方にはボヘミア、モラヴィアのスラヴ人との交易から遠くロシア商人を吸引した市場があった。

かく考えると、カロリング後期は経済の発達を保障する平和が少なかった時期であり、これは比較的安定していたカロリング初期とは異なっている。この時代差を認めずに一律にカロリング時代を考えることは許されない。この時代差のほかに、さきにふれたようなイタリア、ドイツ、フランスという地域差をも考慮に入れるのでなければ、商業の展開を正當に理解することはできない。いわんや、商業の範囲は当時知られた「世界」にわたっていたから、とりわけ商業技術の発達していた先進アラブおよびビザンツの事情を考慮に入れる必要があり、このため、アラブやビザンツ側の史料を利用し比較考慮してはじめてカロリング時代の商業の範囲および国際商業の重要性についての十全な解明を与えることができるであろう。本稿は、カロリング初期における商業を考えたいものにする。

注⑩ 拙稿、カール大王の政治生活、本誌第九巻第一号、一一一頁。

⑪ 「シリア人」とは本来のシリア人のほかに、ビザンツ帝国の臣民でキリスト教を信ずる近東地方の人々を区別なく総称したものである。拙著、西洋経済史（古代・中世）、三和書房、昭和三年、二八三、二九五頁ならびに拙著、西洋中世都市発達の諸問題、一条書店、昭和四年、五五頁以下を看よ。

⑫ サン・ドニ修道院へのパリ市場税の下賜についてのビュン王の確認状（七五三年）。M. G. *Diplomata Karolinorum*, I. No. 16, pp. 6—10.

⑬ サン・ジェルマン・デ・プレ修道院への通行税収入の下賜状（七九七年）。M. G. *ibid.* No. 122, pp. 170—171.

⑭ カール大王がメルシア王オファに宛てた書翰（七九八年）。M. G. *Epistolae Karolinorum Aevi*, II. No. 100, pp. 144—146.

⑮ 前掲拙著西洋経済史、二八四頁。



- ⑯ デイデーデンフォーフェン（＝チオンヴィル）勅令（八〇五年）によれば、スラヴ、アヴァール人に対するフランクの国境市場は、シェーツセル、バルドウィーク、マグデブルク、エルフルト、ハルシュタット、フォルヒハイム、ブレームベルク、レーゲンスブルク、ロルヒにあった。前掲拙著、西洋中世都市発達の諸問題、七六頁。
- ⑰ 前掲拙著、六一頁。
- ⑱ カール大王によるランゴバルト王国（七七四）、イスパニア辺境（七九五、八一〇）、バイエルン（七八八）、ザクセン（七九七）、エルベ河およびドラウ河のスラヴ人居住地方の併合（七九六）を思いあわせよ。
- ⑲ イブン・クルダード・ベエの『道程および都国誌』における記事、前掲拙著、六五頁。
- ⑳ 前掲拙著、六一―六四頁を見よ。